



# プールサイド キーパー



来間タロー

## 今年も夏がやってくる

---

ここは 南九州にある リゾートホテル  
毎年夏休みになるとホテルのガーデンプールがOPENし  
ファミリーやカップル達が プールで  
夏の楽しい思い出を作り 帰っていく  
そして 8月の末日をもって プールはCLOSEする

このリゾートホテルの名は SOLEIL (ソレイユ)  
フランス語で 向日葵という意味がある  
先代の支配人が 大の向日葵好きだったので  
この名が付けられた

7月上旬今年も夏休みを目前に控えたSOLEILでは  
プールOPENの準備が進んでいた

「キャプテン、今年も 夏が来るな。」  
「はい、支配人。  
プールOPENまで あと2週間になりました。」

「そろそろ夏の学生アルバイトを募集する頃だろ？」  
「はい、既に去年の経験者の中で  
印象の良かった者にはメールを送信しました。」

「そうか。それで人数は足りるのか？」  
「不足分は例年通り地元の高校に募集を掛けます。」

この SOLEIL近郊の高校は 2校あり  
どちらも夏休み限定の社会勉強という目的で  
SOLEILでの夏季アルバイトを容認している

「今年は どんな夏になるのかな？楽しみだよ。」  
「きっと、ゲスト(お客)様にとっても、  
生徒諸君にとっても良い思い出になるかと……」

現在のSOLEIL支配人は 地元高校のOBで  
高校時代にSOLEILでの夏季アルバイトを

3回 経験していた

この時の経験が 良い社会勉強になり  
ぜひ 後輩達にも経験して欲しいという思いから  
夏休みの学生アルバイトは  
毎年 夏の恒例行事となっている

一週間後、オファーメールからの返信があり  
新採用者3名を含む合計 10名の  
夏季アルバイトメンバーが決定した

夏休み直前の日曜日 夏季アルバイト達が集められ  
キャプテンから 仕事内容の説明を受けていた

「今からそれぞれが担当する 仕事の分担を決めて頂く。  
仕事内容は 金魚すくい、ヨーヨー釣り、輪投げ  
といった祭りコーナーとプールサイドでの警備  
そして それらの金券販売窓口の受付だ。」

皆 それぞれ希望する任務を協議していたが  
プールサイド警備だけが なかなか 決まらなかった

プールサイドの仕事は 暑い中 外での任務になるので  
夏季バイトの中では 最もキツイ仕事になる

なかなか決まらない事態を見たキャプテンから  
一つの提案があった

「林田君。プールサイドキーパーをしてくれないか？」  
「プールサイド警備の事ですか？」

「そうだが、仕事は警備だけじゃない。」  
「プールの水質管理や  
プールサイドでのドリンク販売等もある。」

「三年生の林田君は 過去2回 夏季アルバイトを  
経験しているし、この10名の中で一番  
SOLEILの事を知っている。

また、体力もありそうなので ぜひお願いしたい。」

「判りました。」

「それと、特にゲストが多い土、日曜日には、  
ドリンク販売の応援を出すから安心してくれ。」

「助かります。」

「その応援だが、岡元さんに お願いしたいが、  
岡元さん 如何かね？」

「はい、判りました。」

こうして 担当が決まり 勤務シフトも決定した  
そして 祭りコーナーが設置されプール清掃も終り  
SOLEILにも もうすぐ夏(プールOPEN)がやって来る

## Are you Ready ?

---

夏休み初日アルバイト達は バイト初日を迎えた  
キャプテンから 接客のマナーや注意点を聞いている

「いよいよ、今日から夏休みだ。  
ファミリーのゲスト様が多く お越しになる。  
決して失礼の無いように 笑顔で対応してほしい。  
自分の仕事で 何か不明な点は無いだろうか？」

「……特にありません。」  
「では、何か問題が発生すれば すぐに通報してくれ。」

「では、各自 持ち場に行ってくれ。」  
「はい。」

夏季アルバイト達は 自分の担当場所に別れて行った  
そして プールサイド担当の林田は  
屋外にあるプールへと向かった

ここのガーデンプールは 長さ20m程の  
ひょうたん形状で水深1mである  
すぐ横には 幼児用の浅いプールも隣接されていた

プールサイドには 円形テーブルとスタンドパラソル、  
ベンチが 20セットある  
プールサイドの周囲には 緑色の芝生が植えてあり  
パターゴルフやグラス(芝生)バレーも 楽しめる

そしてガーデンプールエリアの先端からは  
遠くの海が見渡せるようになっており  
そこには 支配人の姿があった

「支配人、おはようございます。林田です。」  
「おはよう。林田君か 覚えているよ。  
今年で3年目、SOLEIL最後の夏になるね。」

「はい、今年も よろしく お願いします。」

「ああ。今年は何田君がプールサイドキーパーかい？」

「そうです。キャプテンから指名されました。」

「そうか、プールサイドキーパーは  
夏季バイトの要で 重要な任務だ。

何しろ ゲスト様の命に関する仕事だからな。

特に小さな子供には要注意だぞ。」

「はい、承知しています。」

「うむ。じゃ、プールに水を入れてくれ。」

支配人は そう言うと プールを去っていった

林田は 水道のバルブを開き プールに水を注ぎ始めた

「さーて、SOLEIL最後の夏 頑張るぞ！

バイト料で……何買おうかな……」

午後 3時のチェックイン開始まで あと5分となった時

支配人を始め キャプテンや他の従業員、

そして夏季アルバイト達がロビーに集結していた

そして 支配人は 皆に声を掛けた

「今から SOLEILの夏が始まる。

Are you ready ? (準備はいいか)」

「Yes,sir. !」

そうして 集まった者全員が 玄関に並び ゲストを歓迎する

「ようこそ SOLEIL へ。ごゆっくり お楽しみ下さい。」

次々とファミリーゲストが訪れ ロビーは 一気に活気付いた

## プールサイドに咲く向日葵

---

夏休みとなると ファミリーゲストの人数も多くなる  
プールで子供が溺れていないか  
水が汚れていないか チェックしたり  
ゲストから シャッターを押して欲しいという  
要求に応じるのもプールサイドキーパーの仕事だ

また、テントで カキ氷やドリンク販売の接客も行う  
暑い中 右往左往している 林田は 内心 愚痴っていた

(こりゃ、思ったより大変だ。  
平日でも 応援が欲しいくらいだ。)

夏休み 最初の土曜日  
プールが混み始める10時頃  
応援の女子バイトがプールサイドに現れた

「林田さん、岡元です。応援に来ました。」  
「待ってたよ、おかもっちゃん！」  
早速、店番頼む。俺は水まきするから。」  
「はい。」

林田は プールサイドに 水をまき始めた  
太陽の熱で コンクリートが熱くなり  
ゲストが歩きにくくなるのを予防する為だ

それから プールの水面に浮いている  
木の葉等を取り除き、  
ゲストのシャッターを押した後、テントに戻って来た

「林田さん、お疲れです。  
いつも こんなにバタバタしてるんですか？」  
「そうだよ。俺って すごく可哀そうだろ？」

「大変だとは思いますが。」  
「ところで、岡元さん今年初めてだよな？何年？」

「はい、A高校1年です。」

「俺、B高校の3年。

SOLEILの夏は3度目だ。ヨロシク。」

「よろしくをお願いします。」

「お、仕事だ。」

林田は足早に 空いたテーブルに向かって行った  
飲み終えたドリンクのグラスを回収する為だ

持ち帰ったグラスを 林田が洗おうとすると  
岡元が声を掛けた

「あ、私 洗います。」

「そう？ じゃ 頼むよ。」

そこへ 中学生ぐらいの 女子達がやってきた

「おにいさーん。カキ氷くださーい。3個。」

「はーい。」

林田は 慣れた手つきで カキ氷を女子達に渡した

「はい、おまたせー。ありがとう。」

「サンキュー。ところで、お兄さん、  
カメラのシャッター押して貰えますか？」

「いいですよー。」

「じゃ、お願いしまーす。」

そう言うと 女子達は

林田を自分達のベンチの方へ連れ出しポーズを取り

林田は 笑顔で シャッターを何回か押して

テントに戻って来た

「いやー、10回もシャッター押す事になったよ。」

「いーじゃないですかあ。」

「えっ？」

「キワどい水着の女の子達に  
鼻の下をデレーっと伸ばして  
結構楽しそうでしたけど！」

「あれは、営業スマイルだっちゅーの！」

「私も営業してこよっと。」

岡元は そう言うと 空いたグラスの回収に回った

林田は 内心思った

(何か悪い事 言ったかな？)

それとも暑いから 機嫌が悪いのかな？)

グラス回収から帰って来た岡元は

気付いた事を 林田に尋ねた

「向日葵がたくさん植えてあるんですね。」

「うん。何でも 先代の支配人が向日葵好きで、  
今でもプールサイドに植えてあるらしい。」

「へえ、良く知ってますね。従業員みたい。」

「何しろ 今年で SOLEIL 3年目だからね。」

あ、SOLEILって フランス語で  
向日葵っていう意味なんだぜ。」

「そこから ホテルの名前が付いたんですね？」

「その通り。」

「向日葵の花言葉って知ってます？」

「いや、知らねー。花言葉って何？」

「もう、いいです。」

呆れた岡元は もう一度 向日葵の前に行き

一人じっと眺めていた

(向日葵の花言葉はね

『あなただけを見つめている』なんだよ)

すると 幼稚園児位の男の子が岡元に話しかけた

「お姉ちゃん、向日葵好きなの？」

「う、うん。少しね。」

林田は 子供の話し相手をする岡元を見て思った  
(結構 可愛いな)

林田には どの向日葵よりも  
岡元の笑顔の方が 輝いて見えた

## 真夏の日差しより熱い視線

---

7月下旬の夏休みに合わせてスタートした SOLEILの夏は  
順調に進んで行き ゲスト(宿泊客)の評判も好調だった

アルバイト達も 次第に要領を掴み ゲストの対応にも慣れてきて  
特に 小学校低学年以下の子供には 女子バイトが 色々相手をしていたので  
チェックアウト時に 淋しさから 泣きだす子供までいて  
ゲストの良い思い出となっていた

そして プールサイドキーパー林田と土日応援の岡元の息も合ってきた  
岡元は 小さな子供に声を掛けたり 退屈そうな子供の相手をしたりと  
明朗活発さを発揮した

ゲストのアンケート結果では プールが楽しかったという意見が  
ダントツに多かった

今日は8月30日 土曜日 遂に 8月最後の週末が訪れた  
ゲストやアルバイト達 そして SOLEILにとっても  
この夏 最後の二日間である

「支配人、いよいよ 最後の週末ですね。」

「そうだな、キャプテン。いやー、今年も 皆良くやってくれたよ。」

「その言葉 まだ早いです。明日の夜に 取っておいて下さい。」

「そうだったな。」

「ところで、今日 ゲスト様の中で お一人 誕生日を迎えられます。」

「おお、そうか。では、例のモノを……」

「承知致しております。」

今夜 誕生日を迎えるゲストは 毎年この時期に宿泊している  
北九州からの 3人家族のリピーターである

その3人家族は 午後4時頃チェックインし プールで楽しんでいた  
父は まったく泳ぐ気が無く プールサイドのベンチでビールを飲み  
母は カクテルを飲みながら スタンドパラソルの下で  
日差しから 隠れていた

そして 中学3年生の娘は 一人でプールに浸かっていたが  
やはり退屈そうであった

年頃のこの娘は 既に親離れをしており  
今更 親とプールで戯れる気も無いが  
一人となると やはり寂しさを感じていた

「家族と旅行に来るのもこれが最後かな。」

そう思いながら 娘は一人プールから出て  
ラウンジでソフトドリンクを飲んでた

そこへ 巡回中の支配人が 偶然 娘の前を通った時  
足が止まり 支配人は 目を疑った

(似ている。まさか……)

支配人の視線に気付いた娘は とっさに 問い掛けた

「あの、何か？」

「あ、いえ 知ってる方と 似てらしたもので 大変失礼しました。」

「そうでしたか。」

「お寛ぎのところが不愉快な思いをさせてしまい 申し訳ありません。」

「いえ。大丈夫です。」

「では、ごゆっくりどうぞ。」

そう言うと 支配人は テーブルの上にあったドリンクの  
伝票を持って去って行った

そして 午後6時30分になると 家族3人は お洒落着に着替え  
SOLEIL最上階にある 海が見えるフレンチレストランへと向かった

レストランの席に着くと 窓の外に広がる大海原を背に 父が言った

「さあ、1年ぶりのフランス料理だ しっかり食えよ。」

「あなた、ここで そんな言葉使い止してよ 恥ずかしい。」

「判りましたで ございます。」

ごちない会話の中 若いイケメンのウェイターがワインを運んできた  
そして 直径20cm程のケーキが 娘の目の前に置かれた

「うわっ、すごいケーキ。」

「ちょっと、兄ちゃん。俺はこんな物 頼んでないけど。」

「このケーキは お嬢様のお誕生日祝いにと  
料理長からのプレゼントです。」

「す、すると タダって訳ね？」

「無論 サービスでございます。ご迷惑でしたでしょうか？」

「そっか、じゃ、貰おうか。」

「あ な た！」

「う、料理長のお気使いとても嬉しく思います。」

空気の読めない オヤジの会話で 一瞬ヒヤとしたが  
いつの間にか テーブルの周りには  
数人のウェイター、ウェイトレスが来ていた

「佐東 綾さま 15歳のお誕生日 おめでとうございます！！」

「おめでとー。」

そう言うと 周囲の客からも 拍手が贈られ  
娘は 照れながら お礼を言った

そして 賑やかな食事の後 料理長が 料理の挨拶に来た

「本日は ご来店 ありがとうございます。如何でしたでしょうか？」

「いやー、腹一杯だよ。」

「お父さんは、話さなくていいの！」

娘が突っ込むと すぐさま 母がコメントした

「私は、ナヴァラン(羊肉の赤ワイン煮込み)を毎年楽しみにしてるの。  
ワインが肉に しみ込んで 香りも良く 今夜も美味しかったわ。」

「私は、フリカッセ(子牛肉などのホワイトソース煮込み)。

すごく 美味しかったです。

それと ケーキも ありがとうございました。」

「どういたしまして。それでは、またのご来店 お待ちしております。」

挨拶を終えた家族は 席を立ち レストランを出ようとした時  
出口に支配人の姿があった

「あ、おじ様 さっきは ソフトドリンク 御馳走様でした。」

「いえ、ディナーは 楽しんで頂けましたか？」

「はい、とっても。」

「それは、良かったです。」

「綾、こちらの方は？」

「支配人さんよ。さっき、ドリンクを御馳走になって。」

「それは、ありがとうございました。」

「いえ、とんだ ご迷惑をお掛けしたもので お詫びにと……」

挨拶を交わした 支配人と母は 目を合わせると  
互いに驚き 言葉には出さなかったが

一瞬で相手が 誰であるかを把握した

レストランを出て 部屋に向かう 母の表情は硬く 強張っていた

「ま、まさか。あの人が……」

## 地上の天の川

---

土曜日 午後 9時過ぎ 一人の女子バイトが  
薄暗いプールサイドにやってきた  
そこには 後片づけを終えて 帰ろうとしていた林田がいた

「あ、林田さん。」

「よ、岡元 どうした？ 今日のプールはCLOSEDだぜ。」

「知ってますよー、そんな事。」

「じゃ、何で こんな時間にプールへ？」

「明日の宝探しゲームの 準備に来たんです。」

「へえ、そりゃ 御苦労さん。」

「じゃ、後プールの戸締りヨロシクな。お疲れー。」

「ちょ、ちょっと 林田さん！」

「な、なんだよ？」

「林田さんって、冷たい人ですね！」

「へ？ 何で そうなる訳？」

「か弱い乙女を こんな時間に こんな場所で 一人にさせる気ですか？」

「だって それ君の仕事だろ？ 俺の仕事は、今終わったばかりで……」

「まーだ 終わってないでしょ？」

「いや、確かに全部 終わったけど。」

「私がお宝を全部隠すまで ココにいるのも  
プールサイドキーパーの仕事じゃないですか？」

「う〜ん、まあ どうせ暇だし、いいか。」

「じゃ、早いトコ終わらせてくれよ。」

「早く、帰りたいなら 手伝ってくればいいじゃないですか？」

「あー、判った。で、何をすれば 良いのかな？」

岡元は 持っていた大きな袋を 林田に見せた

「ここにある お宝を プール周辺に隠すんです。」

「へえ。」

「子供が見つけ易い場所と 見つけにくい場所へ 隠して下さい。」

「難しい注文だな。何で使い分けるんだ？」

「ゲーム開始直後 お宝はザクザクと見つかって

子供達のテンションは上がります。

そして、皆が欲しがると超ビッグなお宝は なかなか見つからないが、  
さんざん探し回って遂に見つかる。ソコが盛り上がるんですよ。」  
「ナルホド、グレートなシナリオだ。」

「でしょ？」

「じゃ、始めるか。」

二人は お宝の入った 大きな袋を持って プール周辺を回り 隠していった  
そして メインの超ビッグな お宝を隠そうとした時  
プールに一人の男が現れた

「あ、誰か来た。こっち来て。」

岡元は、林田の手を引き 何故か プール脇の植え込みに隠れた

「おい、何で 隠れるんだよ。」

「しー。 あの人 支配人ですよ。」

何故 支配人から隠れないといけないのか 意味が判らぬまま  
林田は 岡元の 言う通りにした

支配人は 誰も居ないプールサイドのベンチに 静かに腰をおろし  
夜空を見上げて 物思いに耽っていた

「支配人は 星座を見るのが 好きなのかな？」

「知りません。それより、黙ってて下さい。」

しばらくすると 一人の女性が プールに現れた

「おおっと、これはスクープだ。

アルバイトを見た。リゾートホテル支配人の浮気。」

「静かにして下さい。聞こえるでしょ。」

女性は支配人に近づき 支配人は立ち上がった  
そして 二人は 見つめ合い 支配人から言葉を掛けた

「旧姓 中野さん だよな？」

「そうよ 吉村君。」

「懐かしい。30年ぶりかな？」

「信じられないわ。吉村君が まだココにいるなんて。」

「俺達が 最後に ココでアルバイトをしたのが高校3年の夏で、  
あれから30年になる。

高校卒業後、俺はココに就職して 今じゃココの支配人になったよ。」

「すごいわね。当時 そんな夢みたいな事を言ってたけど  
まさか 本当に そうなってるなんて……」

この二人 高校は違ったが 同級生であり 共に高校1年生の時から  
毎年 SOLEIL の夏季アルバイトに来ていた

そして 二人は 当時 互いに 特別な想いを抱いていたが  
想いを告げることなく 3回目の夏が終り  
そして お互いの存在が思い出に変わっていた

あれから 30年の時が流れて 今 二人は再会したが  
互いに 言葉に詰まり 何を話して良いか 判らなかつた

「あ、30年ぶりに会ったと思ったけど 実は お互い気付かないまま  
俺達 この数年間 毎年 ココ(SOLEIL)で 会ってたんだな。」  
「そう……なるわね。」

「ココ(SOLEIL)に居れば いつか君と また会えると 信じてた。」  
「私も 同じよ。毎年 娘の誕生日に合わせて来てたけど いつか……」

中野は 言葉を失い 頬には 涙がこぼれた  
吉村は 中野を抱きしめたかったが 今となっては それはできない

手を伸ばせば すぐ届く距離に 昔恋した人がいる  
しかし 互いに別の家庭がある それは どうしても 近づけない距離だった  
二人共 身動きすらできず ただ見つめ合うのが精一杯

夜空には 無数の星が輝き プールの水面には 月明かりが映り  
その月明かりは 風が吹く度に 細長く 揺れて 川のように見える

30年前に恋した二人は SOLEILという名の  
地上の天の川で 再び出逢った

## 恋の駆け引き

---

プールで吉村と会った夜 10時半頃  
中野が 部屋に戻ると 夫は酔い潰れて熟睡状態だったが  
娘はTVを観ながら 母を待っていた

「お帰り、長い お風呂だったね。」  
「そ、そうね。お風呂が満員で、かなり待たされたからね。」

中野は苦し紛れの嘘を言ったが 年頃の娘を 誤魔化すことはできなかった

「私 もう、子供じゃないんだから そんな嘘 通らないよ。  
プールで誰と会ってたの？」  
「えっ、知ってたの？」

「どの部屋の窓からも プールが一望できるでしょ。  
この窓から丸見えよ。答えて。」  
「お父さんには 内緒にできる？」  
「うん、約束する。」

中野は さっきの事を娘に話した そして 娘は真剣に聞いていた

「お母さんは 支配人さんが 好きだったんだ？」  
「そうよ。好きだった。」

「告げなかったの？」  
「自分からは 告げられなかったの。  
でも、彼は お母さんの事を 想っててくれるような気がして……」

「待ってたんだ？」  
「そうね。」

「でも、アプローチは あったんでしょ？」  
「あったけど、気の無いふりをして 逃げてたかな……」

「えっ、何で？ 待ってたのに。」  
「……追い掛けて来て 欲しかったの……  
でも、その手は 彼には通用しなかった。  
彼は 淋しい顔をしていたわ。」

「残念だったね。」  
「恋の駆け引きって、ホント 難しいわ。 」

中野の目には 涙が溢れ 当時の真剣だった想いが 娘に伝わった  
その夜 娘は中野と寄り添って寝た まるで傷付いた姉妹を守るかのように

一方 支配人と中野が プールサイドから去った後  
植え込みから 抜け出した 林田と岡元は 仕事を終え  
自転車で 一緒に 帰っていた

「あの二人。昔 絶対 恋してたに違いないわ。」

「かもね。」

「大体 好きなら 好きって ハッキリ 言えば良かったのに。」

「まあ、今の時代と違って 昔は ……」

「そんなの ゼーンぶ 言い訳よ。」

「はい、はい、判りました。しかし、随分お怒りモードだな。」

「昔、言わなかったくせに 今更 何が『会えると信じてた』よ。」

「熟年世代の気持ち 俺達には 判んねーだろ。」

「あ、この辺で いいです。」

「そうか？」

「はい、家は すぐそこですから。

送ってくれて ありがとうございます。」

「んじゃ、お疲れー。」

「お休みなさい。」

「……お、おう。」

二人は 挨拶を交わすと 別々の方向へと 自転車を進め

林田は この時 何かを感じていた

プールサイドの植え込みに隠れた際 岡元から握られた 林田の右手

何故か その手が 今でも 熱く感じた

「お休みなさいーい か、いいなあ。」

満月の深夜に 自転車に乗って 不敵な笑みを浮かべる林田は

誰の目から見ても 非常に怪しかった

# 夏のフェイドアウトと恋のフェイドイン

---

8月31日 日曜日 夏休み最終日であり SOLEILプールの最終日でもある  
同時に 夏季アルバイトの最終日であった

そして 朝9時30分 SOLEIL最終イベント  
宝探しゲーム が 始まるうとしていた

昨日宿泊したゲストは 今日 11時までにチェックアウトすれば良いので  
大方のファミリーは 10時位まで プールで楽しむ事が多い

宝探し担当の岡元と プールサイドキーパーの林田は  
プールサイドのテントで ゲームの説明を始めた

「では皆さん、ゲームのルールを説明します。」  
「お宝は このガーデンプールエリア内に 隠されています。」

「お宝は 早い者勝ちですが 一人 3個までになっています。」  
「3個以上 見つけても構いませんが プールを出る際に  
必ず どれか3個以内にして下さい。」

宝を探す子供達は 真剣な表情で 話を聞いていた  
3歳位の小さな子供から 中学生位まで 概ね 30人程度であった

「制限時間は 15分間、どんな お宝が隠されているかは お楽しみ。」  
「では、宝探しゲーム スタート！」

子供達は お宝を探しに 一斉に散って行った  
小さな子供の親達は ビデオカメラで撮影しながら 後を付いて行く

そして 岡元と林田は 緊張した面持ちで テントで待機している  
このゲームをプロデュースした岡元は 心配だった

「盛り上がりますかね？」  
「大丈夫だ。最初に 誰かが見つければ 勢いがつく。」

「あっ、見つけた！」  
「俺も 見つけた。」

次々に お宝は見つかり 盛り上がり始めた  
ビデオ撮影している親達も 歓喜を上げ始めている

3個のお宝を見つけた子供達は 早々と帰ろうとし始めた  
そこへ すかさず 林田が 言葉を掛けた

「君達、ま〜だ、超ビッグな お宝が発見されて無いが

「良いのか〜い？」

「そうよお、今帰ったら 勿体ないわよ〜。」

帰ろうとしていた子供達は 二人の言葉に 感化され  
再び プール周辺の庭へと 散って行った

「おお、すげー、見つけたぞお！」

「ああ〜あ、いいなあ。」

小学6年生位の男子が 超ビッグな お宝を見つけたところで  
ちょうど 制限時間の15分になり ゲーム終了

子供達は皆 満足そうな顔で プールを去っていった  
そして 宝探しゲームは 大成功に終わった

「岡元プロデューサー、お疲れ。バッチリだったな。」

「あ、はい。ありがとうございました。」

少しの間 二人は見つめ合い 喜びを分かち合った  
そして 二人の間には 特別な気持ちが 芽生え始めていた

午後になると ゲストは皆 チェックアウトして いて  
SOLEIL内 にはスタッフだけになった

これで 夏季イベントは全て終了し  
アルバイト達は 各自の後片づけを始めた

祭りコーナーに設置されていた 金魚すくい、ヨーヨー釣り、  
輪投げ、的当てなど撤去され 賑やかだった 夏が終ろうとしている

そして ガーデンプールでも プールの水が抜かれ  
林田が 一人 プール底の清掃を始めていた

「ふう、今日で SOLEILでのバイトも終りかあ。

明日から学校だし、ブルーになるな。」

午後3時頃 水を抜いたプール底に立つ林田の傍に 岡元がやってきた

「林田さん、お疲れです。」

「おう、岡元プロデューサー、どうした？」

「自分の担当が終ったんで 手伝いに来ました。」

「そっか、ワリいな。でも、もうほとんど 終りなんだ。」

後は、仕上げに プール全体に水を掛けて 任務完了だ。」

「そうでしたか。もっと 早く来てれば……」

「いや、良いって。そうだな、じゃ 仕上げに  
このホースで水を掛けてくれかい？」

林田は そう言って ホースを岡元に手渡し

ホースを受け取った岡元は 何故か 不敵な笑みを浮かべた

「水を……掛けるんですね？」

「おう、びしゃーっと。」

「じゃ、いきますよー！」

「お、おい まさか？」

殺気を感じた林田は とっさに逃げたが

岡元は 手に持ったホースを林田に向けて 水を思い切り浴びせた

水は 林田の全身に 当たって 飛び散り ずぶ濡れ状態になった

「岡元一。やってくれるじゃねーか。」

「あははは、だって、水掛けろって言われたから……

でも 既に 服が濡れてたんだし。大差ないでしょ。」

「ホースよこせ！」

「ダメです。近づくと、また水掛けますよ。」

「んじゃ、いつまでも 帰れねーだろ。」

「……コレが終ったら、私達 もう会えないんですね？」

岡元は さっきと打って変わって 淋しい顔をした

その顔を見た 林田は 急に胸が締めつけられるような思いがした

「あ、あのさ、今日バイト料貰ったら デイナーでも どうだい？」

「その格好で 行くんですか？」

「着替えるに決まってるだろ！ それに、岡元がやったんじゃないか。」

「あはっ 。じゃ、喜んで。」

笑顔に戻った 岡元と 息苦しい林田は

二人だけの 水の無いプールの中で 見つめ合った

そして プールサイドの向日葵には 小さな虹が掛っていた

二人の SOLEILでの 夏が終り

二人の恋が 始まった